W・S・クラークと新島襄

―クラークと新島襄との師弟愛―

末光力作

明治初年、政府の文明開化政策に協力して所謂、「お雇い外国人」が多数来日して広く日本の文化に大きな足跡を残していった。その中には大森貝塚の発見者E・S・モースやベルツ水の名を残した医学者E・ベルツなど多士済済である。しかし、日本人の多くが三指の中に入れるのは一八七六（明治九）年、札幌農学校開校にあたり代理校長として来日したW・S・クラークではないだろうか。彼が日本の科学、思想史の上に残した足跡は彼が別離のとき残した「ボーイズ・ビ・アンビシャス」の言葉と共に余りにも有名である。ところがクラーク程日本で有名で本国のアメリカで知られていない人は珍しい。北海道大学の学生でクラークのことを知らない人は皆無

であろう。しかし、アーモスト大学やマサチューセッツ大学の学生でクラークのことを知る人は皆無に近いであろう。

さて、新島襄がクラークの弟子であり、帰国後も太平洋を挟んで温かい師弟の交わりを持ったことは案外知られていない。いや、かく言う筆者も曾ては両者の関係についてはまったく無智であった。ところが約一〇年程前、筆者はたまたま新島宛のクラークの手紙七通が同志社社史資料室に保管されていることを知った。資料室にお願して読んでみると、これらの手紙には今まで知られていない事柄が満ちているではないか。筆者は興奮した。まさに新しい新島像、クラーク像の発掘であった。

新島とクラークの交わりは新島が一八六七（慶応三）年アーモスト大学へ入学したときに始まる。新島はクラークのアーモスト時代、そしてクラークが歿するまで学問的にまた精神的に大きな影響を受けた。中でも面白いことに二人はお互いに日米植物の種子の交換をやっている。詳細は既に筆者が「新島研究[12]」誌に書いているので参考にして頂ければ幸いである。

明治初年、日本に二つの異色の学校が呱々の声をあげた。その一つは一八七五（明治八）年創立の他ならぬ同志社英学校で新島の熱い祈りを以て八名の学生で出発した。いま一つは未開の蝦夷地札幌に一八七六年設立された札幌農学校であった。後者は官立学校でありながら宣教師ならぬ代理校長で科学者クラークによって聖書に基礎を置く人間教育が行われた。キリシタン禁止が解かれたのが一八七三（明治六）年のことであるから、官立学校で堂々と聖書が説かれたことはまことに奇跡と言わねばならない。その結果、周知のように聖書に触発された優秀な人材が世に送られたが、これは他の官立学校では到底見られないことであった。この二つの学校は聖書による教育以外にも共通点が多く見られる。先ず両者とも授業は主に英語で行われたことと、いま一つは自然科学を尊重し実証的精神を養ったことである。札幌農学校は北海道開拓のための技術者を養成するのが目的であったから、自然科学を尊重するのは当然であるが、一方、同志社英学校の開講科目の約半数が自然科学に関するものであったことは注目に値する。その他体育、演説法などかなり教養科目が取入れられているのは、新島もクラークもカリキュラムの作成にあたって母校アーモスト大学のリベラルアーツ教育が念頭にあったことは論を待たない。師と弟子が作った学校であるから類似点があるのは当然であろう。

クラークは一八七七（明治一〇）年札幌からの帰路、

神戸から札幌農学校一期生佐藤昌介に手紙（五月一四日付）を送っているが、その中で新島のことを「私の最初の日本人生徒」（My first Japanese pupil）と述べている。新島は一八七一（明治四）年、駐米少弁務使の森有礼にボストンで会っているが、そのとき森から長州藩出身の内藤誠太郎（後の森誠太郎）のマサチューセッツ農科大学入学につき尽力する様に要請を受けたのである。新島はこれに答えて森と共にアーモストにクラーク学長を訪ね、内藤のことを依頼した。その結果内藤は入学を許されクラークの「二番目日本人生徒」となった。その後これが縁となって総計六名の日本人がクラークの生徒となった。クラークは札幌に赴任するとき内藤を通訳として連行している。クラークが八ヵ月半という短期間の札幌滞在であれだけの成果をあげた背景には日米両国の事情に精通した内藤の内助の功があったのと、今ひとつは彼が既に数人の日本人留学生に接した経験から日本人の気質をよく理解していた為と考えてよい。森以外にも新島は岩倉使節団の一員として渡米した田中不二麿（後の文部大輔）と共にクラークを訪ねている（一八七二年四月二四日）。クラークの記録[3]によると岩倉具視もアーモストを訪問し、クラーク学長に会い農科大学を見学している。そのとき岩倉は大いに感激して日本にもこの様な立派な農科大学を設立する必要性を痛感したという。当時、岩倉とクラークを結ぶ最適人物は新島を措いて他に求められたであろうか。筆者の推測であるが新島による何らかのお膳立があったものと考えている。札幌農学校の開校にあたって北海道開拓使長官黒田清隆は学校の中心となる人物の物色を米国駐剳公使吉田清成に依頼した。吉田は教育界の第一人者B・G・ノルスロップと相談し、白羽の矢はクラークに当ったと歴史は報じている。推測するに政府筋も岩倉や田中の線を通じてクラークを呼ぶ意志であったのではあるまいか。さらにクラークは何故一年間現役の学長職を休職してまで当時の未開国日本に執着したのだろうか。彼は新島を通じ、内藤ら留学生を通じ、さらに岩倉大使を通じ日本に対する愛着を益々深めたことが彼の札幌行の萌芽となったと筆者は考えている。

新島とクラークとの交わりに関し、どうしても避けて通れない事柄が二つある。クラークの同志社訪問と、死の病床にあるクラークを新島が見舞ったことである。詳細は既報[1]を見て頂きたい。前者はクラークが札幌での任期を終えて帰国の途中で一八七七（明治一〇）年五月一四日か一五日と考えられる。当時同志社は創立して一年半、校舎も寺町丸太町上ル高松屋敷から現在の相国寺畔

に移転したのは明治九年九月の頃であり、校舎も木造二階建が二棟あるだけの貧弱なものであった。創立期の悪戦苦闘の中にあった新島にとってクラークの来学は大きな喜びであったに違いない。クラークは新島の案内で校内を一巡し、各建物に若干ずつ金を寄附し、宣教師デイヴィスに新島のことを宣しく頼むと依頼の言葉を残して去ったのである。まことに心温まる話ではないか。更にクラークは帰国後、同志社のために集会で会衆に募金を訴え、得られた百ドルで書物を購入し同志社に寄贈している。一八七八（明治一一）年二月一一日付のクラーク書簡によると書物名はジョンソン百科辞典、地図、自然史の書物、農学書、聖書註解書、ヌーディー説教集などである。その中の一部は現在も同志社大学図書館に保管されているがそれを知っている人は皆無と言ってよいであろう。残念なことである。

クラークは帰国後二年でマサチューセッツ農科大学長を辞任したが、その後の彼は洋上大学（Floating College）の設立に情熱を燃やすのである。これは教育の在り方として新機軸を示すものであった。内容は汽船中に実験設備を含む全設備を整え、学長、教授一〇名、学生が共に搭乗、共に学びながら世界一周の航海に出て三年で卒業させるというものである。航路はニューヨーク、ヨーロッパ、中近東、インド、東南アジア、中国、日本を経てサンフランシスコに帰ることになっていた。計画はかなり具体的に進行していた。当時ニューヨーク州アルバニーの青年財産家J・O・ウッドラッフからの依頼でクラークは洋上大学の学長となることが決定していた。そして出帆予定日を一八七九（明治一二）年五月八日と内定していた。クラークは出帆予定の約半年前の一八七八年一二月一日と三〇日の二回、新島に手紙を送り、「一八八〇年の五月に日本で貴兄に会い君の学校を見るのを楽しみにしている」旨を述べている。ところが事志と違って出発を前に資金提供者のウッドラッフは死亡し、一切の計画が無期延期となってしまったのである。

この時を境に彼の生涯は栄光から挫折へと移っていった。洋上大学の設立にあくまで執念を燃やしたクラークは自ら設立資金を作ろうとして鉱山の仕事に手を出したのである。一八八〇年彼はアーモスト町民から一万ドルを集め鉱山株に投資したが、事業はことごとく失敗し、町民に大損害を与えてしまったのである。悪いことは続くもので、クラークは心臓病に患り病臥する日が多くなっていったのである。

新島は一八八四年から一八八五年にかけて欧米外遊の旅に出ているが、八五年の三月二日アーモストで恩師ク

ラークに面会している。クラークは翌年三月九日に死去しているから丁度死の一年前である。その頃のクラークの置かれていた立場を当時アーモスト大学に留学していた内村鑑三が述べているので紹介しよう。[4]

先生は私の米国在留中に永眠された。然かも先生の旧友中、一人も公然立て先生の功績を述べて遺族を慰むる者はなかった。私は堪え難く思ひ、廻らぬペンを執り、日本に於ける先生の事業を列記し、之を「アウトルック」誌に投書して米国の社会に先生の為に弁護する所があった。然るに何ぞ計らん私は読者より激烈なる反対を受け、其答弁に困みし程であった。先生が其終焉に際し、米国に於て失意の地位に在りし乎は、此一事に由て見て明かである。実にお気の毒の次第であった。

新島がクラークを見舞ったのはクラークが事業に失敗し、借金取りに追い廻され、健康を害し、まさに尾羽打ち枯らした時であった。こんな時、異国の弟子新島の見舞はクラークにとってまことに感銘深く大きな励ましと慰めになったに違いない。世に名高いクラーク訪日の種を播いたのは新島であり、四面楚歌の中死の床にあるクラークに慰めを与えたのもまた新島であった。天来の摂理を感ずるのである。

（大学工学部教授）

①新島襄先生とクラーク博士「新島研究」六二号三三ページ。
②新島襄先生と植物「新島研究」七二号九ページ。
③逢坂信吾著「クラーク先生詳伝」一一一ページ。
④「内村鑑三全集」一一巻八二五ページ。

山本覚馬と新島襄

福本武久

ペリーが来航した嘉永六年（一八五三）六月、数え年で山本覚馬は二六歳、新島襄は一一歳であった。なぜ年齢などを持ちだすのかというと、歴史の変革をもたらす大事件を何歳でむかえたかということが、世代としての果たすべき役割を決定づけたと思われるからである。

黒船の来航は、新しい国づくりのきっかけとなったといういみで歴史的な大事件であった。幕藩体制を激しくゆすぶり、やがて国内政治は修復できないほど混迷してゆく。そのなかから近代国家づくりの機運がもりあがってゆくのである。その主役となった人物像をながめてみると、かれらの役どころと嘉永六年時点で、どの世代に属していたかということが無縁ではないように思えてく

る。たとえば倒幕のリーダーであった西郷隆盛は二七歳、大久保利通は二四歳、木戸孝允は二一歳、板垣退助は一七歳、大隈重信は一六歳、伊藤博文はわずか一三歳でしかなかった。かれらによって維新が実現されたのだが、その背後にいたのが嘉永六年当時すでにして四〇～五〇代になっていた佐久間象山、緒方洪庵、横井小楠、島津斉彬などであった。つまり明治維新は四〇～五〇代の開明家の思想的な影響をうけた一〇～二〇代によって達成されたといえる。山本覚馬も新島襄も、この世代に属している。

会津藩士の山本覚馬は維新戦争で倒された幕府側の人間であり、国外に脱出していた新島襄は幕末動乱の蚊帳の外にいた。けれども時代のメンタリティーに関していえば、明治をつくった同世代の人物群とほとんど変わるところがなかった。

嘉永六年の夏、藩命によって江戸藩邸に出府した山本覚馬は、おそらく黒船をみたにちがいない。ペリーは翌年の一月にもふたたび浦賀にやってきて三月まで停泊していた。会津藩は江戸湾警固についていたから、覚馬の眼にふれる機会は十分にあった。かれが三年間の江戸遊学中に洋式砲術を修め、にわかに洋学を志すようになったのは、やはり黒船を眼のあたりにしたからだったとしか考えられないのである。

覚馬は江戸遊学で〈国家〉という意識、さらに〈世界のなかの日本〉という意識にめざめた。やがて欧米諸国におしつぶされない強い国をつくらねばならない……と考えるようになる。それは洋式砲術の師であった開国論者の佐久間象山、勝海舟を通じて知った横井小楠の思想によるものである。佐久間象山は積極的な開国を唱えた人物として知られ、横井小楠は尊攘派志士に開明思想をふきこんで開国倒幕派に転化させた思想家である。かれらはともに海軍の建設を提唱していたが、覚馬が後になって著した海防意見書「守四門両戸之策」には、師の象山と小楠という先達の影がほのみえるのである。

新島襄は万延元年（一八六〇）秋、江戸湾に停泊しているオランダ軍艦をみて、欧米の科学文明に畏怖をおぼえた。欧米の先進科学を学びたいという思いから、やがて国外脱出を決意するのも、やはりペリーやブーチャーチンがひきいる外国艦隊が来航してから、はげしく動きはじめた時代の雰囲気と無縁ではなかっただろう。

外国に学んで欧米諸国の侵略に屈しない強い国家をつくりたい……。覚馬も襄も同じように考えていた。それは明治をつくった伊藤博文をはじめとする同世代の人物群とほぼ同質の思想なのである。

維新を実現した群像と思想的に同じ地点にありながら、山本覚馬は倒された側の人間として明治をむかえた。新島襄はがむしゃらに突っ走った。かれは国禁の密航を企て、維新戦争という内乱でもみくちゃにされずに明治をむかえている。それは一五歳という年齢のへだたりのせいだろう。嘉永六年当時すでに二六歳だった覚馬は、三〇歳前後で動乱の世をむかえている。分別盛りの年齢ゆえに世の中がみえすぎていた。さらに覚馬は『徳川第一にせよ』という藩祖の遺訓にしばられていた会津藩士である。新島襄のように冒険的な行動にでるわけにもゆかず、だからといって志士にもなれなかった。幕末の動乱をみずからの運命にしたがって生きぬき、苦悩しながら果たすべき役どころをみつけなければならなかったのである。

山本覚馬にはいくつもの貌がある。撃剣・槍術の達人、西洋式砲術家、洋学者、教育者、産業振興のプランナー、実業家……。剣と槍を執るいかにも剛毅な会津武士だったかれは、ペリーが来航した嘉永六年に江戸に遊学してから洋式砲術家となった。藩主松平容保が京都守護職についたとき、大砲隊の副隊長として京都にやってきた。蛤門の戦いでは砲隊を指揮して長州勢を撃退したが、このころから眼疾に悩みはじめる。視力を失ってからは、〈武〉の人から〈文〉の人に変貌してゆく。かれが三傑にあげている佐久間象山、横井小楠、勝海舟らの開明思想、さらには長崎遊学中に知り合ったボードインら外国人から学んだ世界情勢をベースにして、新しい国づくりに眼をむけてゆく。それらは鳥羽伏見の戦いで倒幕軍に捕えられ拘禁された薩摩藩邸で、かれが口述により著わした意見書『管見』にもりこまれている。

故郷の会津が滅亡してゆくのを傍目にしながら、覚馬が作成に没頭した『管見』は、ひろく世界に眼をむけた文明の原理・原則であるとともに、かれ自身が新時代に生きる原理・原則でもあった。口述ゆえに項目の羅列に終始しているが、『管見』の背後にあるのは西洋のデモクラシーと合理主義精神である。旧幕時代の独裁者による〈私〉の政治ではなく、国家と国民の利益を優先させる〈公〉の政治を背景にして、〈富国〉の産業政策をすすめなければならないという思想が読みとれるのである。

『管見』は新政府の要人からも高く評価され、覚馬は京都府の顧問として産業振興に参画することになる。かれの明治は東京遷都でさびれつつあった京都の再興に着手することではじまった。明治期にあって、京都は日本で最もすすんだ近代産業都市であった。その裏には山本覚

馬がいた。かれは獄中で脳裏に描いた〈世づくり〉のビジョンを、京都の〈都市づくり〉に生かしたのである。かれは維新政府をつくった薩長の人間ではなく、賊軍といわれた会津藩士である。それゆえに中央政府のめざすものとは異なるユニークな行政をめざした。征服者のつくった中央政府にこびることなく、第二の故郷ともいうべき京都を再建設しようと考えたのである。新島襄とともに同志社をつくったのも、そういう決意にいたる精神の巡歴と密接な関係があると思われる。

山本覚馬が密航青年の新島襄と出会ったのは明治八年(一八七五)四月であった。覚馬は数え年で四八歳、襄は三三歳である。

一〇年のアメリカ留学を終えて帰国した新島襄は、キリスト教主義の学校づくりを模索していた。日本を近代化するには、欧米の文明を移入するだけでなく、自由・自治・自立にめざめた青年を育てる。それこそが先進文明に学んだ自分が、祖国にむくいるただひとつの道だとかれは考えていた。そういう精神のありようが山本覚馬の心をとらえたのだろう。新島襄は明治維新というものをまったく信用していなかった。訪米中の岩倉使節団の通訳をつとめたかれは、新政府に仕官しないかと誘われるが、きっぱりと拒絶してしまう。密航の罪を不問にして、正式に留学生として認めようといわれても、聞きいれなかった。政府の奴隷になりたくないというのである。日本に帰国するとき、伝道協会からアメリカに帰化しないかといわれるが、それもはねつけた。あくまで誰にもしばられない身で、キリスト教主義の学校をつくろうと考えていたのである。

新島襄は偶然とはいえ幕末の動乱をうまくのがれてアメリカに渡った。覚馬のように挫折感がなく、新政府にたいするコンプレックスもまったくなかった。それゆえ、ほとんど対等の立場を保つことができた。当時としては、まれにみるユニークな人物だったといえる。維新戦争に敗れた覚馬にしてみれば、薩長の新政府にこびることのない姿勢に共感を覚えただろう。それゆえに山本覚馬が新島襄という人物に、新時代を担う青年を育てるに最もふさわしい教育者像を見いだしたとしても不思議はない。

山本覚馬は新島襄の構想に賛成、二人はただちに京都での学校設立に着手する。その年の六月に襄は覚馬の自宅に住居を移し、英学校設立に奔走するのである。やがて山本家は家族をあげて新島襄をバックアップするようになるのだが、それは覚馬自身が教育に強い関心をよせていたせいもある。かれはすでにして青年時代から、す

ぐれた教育者であった。江戸遊学から帰藩するやいなや藩校日新館に会津藩洋学所を開き、京都にやってきてからも藩主に建言して洋学所を開設している。京都府顧問になってからも自宅で政治・経済講座を開き、京都を代表する政治家や実業家を生みだした。かれは『管見』のなかでも〈学校〉の項で教育の重要性を力説している。《欧米の先進国とならぶほどの文明国にすることが国政の緊急課題である。そのために先ず人材を育成すべきである》と書いているほどである。つねに次代を担う人材の育成につとめていたのである。

同志社英学校は明治八年（一八七五）一一月に開校した。密航青年の新島襄、元会津藩士の山本覚馬にくわえて宣教師デイヴィスの三人でできあがった。同志社は中央政府のつくった官立大学のように、一部のエリートや国家に奉仕する官僚を養成する学校ではなかった。新島襄のことばでいえば「一国の良心となるような人」の養成である。それはさしずめ民間にあって、時代のチェック機能を果たす自立した人材ということであろう。薩長中心の新政府のめざす学校と異なるところに、同志社が位置づけられていったのは、創立者である三人の思想や経歴からみて当然のなりゆきだったと思われる。

同志社の結社人として名を連ねた山本覚馬は、たえず背後から社長の新島襄をささえつづけた。開校当時のかれは、すでにして四八歳であった。そのころになると、かれが心血をそそいできた京都の〈都市（まち）おこし〉のアウトラインは完成して、もはや実行あるのみという状態だった。いわば一定の事業をなしとげ、人生における役割を果たしおえようとしていた時期である。だからこそ次代を担う青年の教育に熱い眼なざしをそそいでいた。覚馬はみずからの夢を新島襄に託し、かれをバックアップすることで、最後の仕事をなしとげようとしていた。

もし山本覚馬がいなかったら、同志社の設立はもっと遅れていただろう。アメリカ帰りの新島襄はほとんど外国人にひとしかった。キリスト教への国民感情も実際には分からず、政府や京都府に折衝する呼吸も知るわけもなかった。とても幕末の修羅場をくぐった覚馬の比ではなかった。

四八歳という年齢にくわえて京都府顧問にあった山本覚馬は、手練手管のネゴシエーターであった。それは会津藩士時代に公用人をつとめた経験によるものだったろう。かれは文久二年（一八六二）、京都にやってきた師の佐久間象山のもくろんだ彦根遷都という密謀に参画していた。皇居を彦根にうつして、天皇を幕府の手中におさ

め、一気に公武合体と開港の国是を得ようというのであった。覚馬は会津藩内の工作はもちろん、他藩にも働きかけていたのである。

会津と同盟関係にあった薩摩との亀裂が生まれようとしたときも、かれは勝海舟とともに衝突回避に奔走した。慶応二年（一八六六）夏のことである。すでにして長州と気脈を通じていた薩摩藩は、長州征伐がはじまっても出兵を拒否してしまった。会津と薩摩の関係が怪しくなり、京都の会津藩士が薩摩藩邸を襲撃するという噂がながれた。その調停役としてやってきたのは、かつての師である勝海舟であった。覚馬は使者の勝海舟と藩主の間を行き来して、事態の収拾にあたった。

慶応三年（一八六七）王政復古の大号令のあと、幕府側と薩長がにらみあったときも、内戦にならないよう最大の努力を重ねている。かれが後年に記した意見書「時制之儀ニ付き拙見申上候書付」によると、六人の非戦派の藩士とともに藩内の説得にあたり、幕府の監察や薩摩藩の小松帯刀、西郷隆盛に働きかけていた経緯がのべられている。「国内で争うべきではない。今は国をあげて外夷の脅威に備えなければならない時なのだ」と、非戦を説いていた覚馬は、鳥羽伏見の戦いの直前まで、開戦の回避に奔走していたのである。

山本覚馬のネゴシエーターぶりは、同志社の設立にあたっても、いかんなく発揮されたとみる。京都府当局や知事より権力をもっていた槇村正直への根回しは、すべて自分の仕事だと腹をくくっていた。当時の京都は西洋文明を積極的に導入していたとはいえ、キリスト教を前面にかかげた学校設立はむずかしかった。切支丹禁制の高札は、明治五年（一八七二）に取り除いてもいいとされていたが、積極的にキリスト教を解禁したわけではなく、諸外国の圧力によって黙認しただけでしかなかった。同志社はキリスト教をひとたび切り離したかたちで英学校の開設に踏みきったが、それは覚馬の知恵だっただろう。事実かれは近代科学の教授を表看板にしたほうが、学校設立は早く実現するだろうと考えていたのである。

たえず新島襄の背後にあって、元会津藩士の山本覚馬は盲目でありながらも、どっしりと構えてにらみをきかせていた。かれは仏教徒の反対運動や、同志社にたいするさまざまな中傷、京都府との関係改善などを一手に引き受け、いかにも会津武士らしい剛毅さで解決にあたっていた。それこそが一世代うえの自分が果たさねばならない役割だと考えていたのである。

（作家・一九六五年大学法学部卒業）

北垣国道と新島襄

河野仁昭

同志社英学校の教員や生徒によるキリスト教演説会が、京都市中で公然とおこなえるようになったのは明治十四年、北垣国道が第三代京都府知事に着任して以後である。そのことはJ・D・デイヴィスの『補正新島襄先生伝』にも記されているが、『同志社五十年史』は次のように書いている。

此年まで同志社の進運を少からず阻碍して居った槇村正直氏は終に元老院議官に栄転して去り、後任として進歩思想に富み人格高潔の誉れ高き北垣国道氏が来任された。京都に於ける此政権の移動は、忽ち其基督教的集会の取締方針の上にも表はれた。此

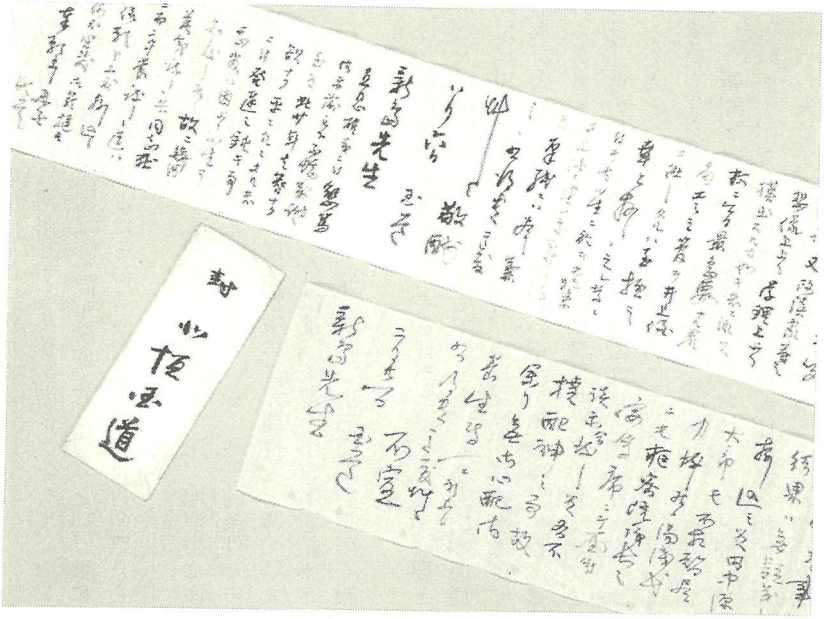
年始めて四条の劇場にて、四千人の聴衆を集むる基督教大演説会が許可された。

同志社にとってはもちろん京都にとってそれは画期的なことだったのである。それ以前にも同志社教員と生徒たちは市中で演説をおこなうことはあった。しかしそれは、「学術演説会」という枠内でのものであった。

木戸孝允の腹心の部下である山口藩士の槇村正直が、初代知事長谷信篤を補佐して京都府政の衝に当たるのは、明治元年九月からである。国際感覚と識見を買って山本覚馬を登庸し、山本が打ち出す京都復興策と近代化施策を、木戸の支援もあって現実のものにしていった勧業行政には、目覚しいものがあった。

だが、槇村は上席にあった松田道之大参事が大津県令に転出し、府政の実権を掌握して以後、独裁色をあらわにする。明治八年七月、第二代府知事に就任後、ことにそうであった。『京都の歴史』第八巻には、槇村は「人民を頑迷固陋とみて自らの行政を強権的に推進した」と書かれている。

同志社との関係でいえば、槇村のキリスト教に対する認識がまさに「頑迷固陋」であった。新島襄は外国人教師の雇入れでさんざん手こずったし、キリスト教を容認する山本覚馬は、明治十年十二月に「御用之無当府出仕



差免候事」というすげない辞令をもって馘首された。

馘首された山本は、明治十二年に府議会が開設されると同時に、上京区から推されて議員になり、しかも初代議長に選任される。槇村が強引に押し切ろうとした地方税追徴を、明治十三年五月の府議会で阻んだのは、山本の弟子を以て任ず若手議員たちであった。

明治十四年一月十九日付をもって元老院議官に転出した槇村の後任として、高知県令であった北垣国道が第三代知事に着任したのは、同年一月二十六日である。

天保七（一八三六）年但馬の中農の子として生を亨けた北垣は、幕末から維新にかけて各地を転戦したあと、樺太・北海道から四国、九州にわたって長官、県令を歴任した人である。地方行政家としての手腕と識見は、当時群を抜いていた。彼の特質は、地方によってそれぞれ異なる民意と実情を把握して、それに即した行政をおこなうことにあった。また、法を設けて人民を強権的に束縛しようとする政府の方針には批判的な行政家でもあった。先の『京都の歴史』第八巻は次のように書く。

難治県といわれた高知県において、土佐の国と異質の民情をもつ阿波国を徳島県として分離独立させて住民自治を促進させたり、民権派の牙城である高知県でも急進的民権派に迎合せず、また特に弾圧もしていないのは、その一例である。

わが国の慣習に拘泥せず「英仏ノ習俗ヲ学ブ」ことにつとめ、「政ヲ自治自由ニ向ルヲ好ム」（同右）という彼に対する批判は、まさにそのことが彼を秀でた行政家たらしめたといえる。

府知事に着任して三カ月後、北垣は早速、地理掛に命じて疎水路の予備調査をやらせている。地理的条件からして疎水運河の開削が京都繁栄の必須要件だとみていたのである。着任の翌年十月には「衆智と小資本を結集させて商業を盛んにするため」（同右）、京都商工会議所を設立してもいる。

こうした勧業施策を策定するに当って、北垣が必要とした人物はおそらく山本覚馬であった。しかも山本の周囲には田中源太郎、浜岡光哲、中村栄助、雨森菊太郎、垂水新太郎、大沢善助ら新しい京都の担い手がいた。これらの多くは新島襄と同志社の理解者であり協力者であった。そのころ新島は次のような手紙を書いている。おそらくA・ハーディーあてであろう。（A・S・ハーディー『新島襄の生涯と手紙』―『新島襄全集』第十巻）

新知事はやがて私を訪問するおつもりだと聞いています。だとすれば、この人は前任者とは相当ちがった人です。新知事に会ったなら、この都会の教育

制度をすっかり改革する計画を提出しようと思います。私の目的は小学校教師たちのための日曜学校を始めることです。

北垣が新島に接触するのは、山本覚馬らを介してであったと思われる。現存する新島の北垣あての手紙のうち最も早いものは、明治十五年十月十八日付で、昨夜はわざわざご来訪いただいたのに、折悪しく外出していてお会いできず遺憾に思っている、と冒頭に書いている。北垣が新島を訪ねたのはこれが最初であったかどうかは詳らかでない。少なくとも顔を合わせることはそれまでにもあったろう。文面からして未知の間柄とは思えない。

北垣の用件は、同志社英学校の生徒である林拾から、家が貧しいので学資の援助をしてもらいたいという申し出を受け、林について新島の意見を聞くことにあった。林は避病院に入院していて、十月十二日に復学した旨が新島の「日誌」にあり、さらに十月三十一日の項には次の記事がみられる。

本日、使ヲ以テ、北垣知事ヨリ林拾氏学資トシ十円遣セリ、但十一月、十二月ノ二ケ月分。

note林氏九月来コレラニ罹リ、学費ノ乏〔シ〕キニヨリ不得止事、知事ニ乞ヒタレハ、知事ハ予ノ宅ヘ来訪アリ、林氏ノ人トナリヲ尋ネ予ノ保証等ヲ得、遂ニ同人ヲ扶助スルニ決シ、此度予ノ手ニ金ヲ送ルニ至レリ。

先の北垣あての新島の手紙は、林拾の人物と学業成績などを懇切にのべたもので、新島は「小生之開校せしは他意あるに非らず、偏ニ人才を陶冶し邦家ニ酬ゆる所あらんとす、故ニ閣下之同人を扶助し賜ふは又小生之素志を賛け賜ふと云ふべきなり」と結んでいる。

キリスト教主義私立学校の一生徒に、多忙多端な知事が示した好意は、おそらく新島校長を信頼し敬愛していたことの現われである。

北垣はやがて令嬢の静子と徳子を同志社女学校に入学させただけでなく、子息の確の教育を新島に託して、同志社予備校へ入れた。だが、確は新島の期待に反することが多く、親元から離して熊本英学校の海老名弾正に託すことになった。明治二十二年三月二十一日付海老名あての手紙に、新島は次のように書いている。神戸から乗船する確に持たせたものである。

右確君ハ一昨年より同志社ヨビ校ニ御遣しニ相成候処、何分勉強心ニ乏しく、又家も近辺ニ有之候事故、兎角我ガ儘起し、神戸辺より参候銭遣いの荒ラキ少年輩ト一緒ニ被成乱費之弊を生じ、旁以勉強ニ不熱心ニ被相成、何ニとも不都合之至、広津友吉君

之工風ニ而熊本辺ニ被参候ハヽ境遇宜しかるべしと被申候間、小生も大ニ賛成し知事ニも勧メ御依頼申上候次第

確の小遣いは幹事に託し、本人には必要に応じてその都度渡すようにしてほしいなどといったことも書き添え、さらに、北垣知事のような人物は「同志社之運動ニ取リ隠然助クル所甚多」いので、その好意を繋ぎ止める必要がある、とつけ加えている。「同志社之運動」というのは、山場を迎えていた同志社大学設立資金の募金運動である。そうした問題を抜きにしても、新島が迷える一匹の小羊を放っておけない人であったことを語る事例にはこと欠かないが、募金運動の背後に北垣国道が控えていたのは事実である。それは疎水事業推進委員がほぼそのまま大学設立委員もしくは理事になっていることにもうかがえる。

北垣は新島が設立しようとする大学の意義はもちろん認めていたであろうが、より基本的にはおそらく新島とのパーソナルな関係による協力であった。「隠然助クル所甚多」しと新島が書いている北垣が、募金運動の表に顔を見せたのは、明治二十一年の春である（詳しくは拙稿「新島襄の大学設立運動㈢」『同志社談叢』十一号所載）

二十一年三月二十三日、新島は山本覚馬と連名で京都府下の設立委員に招請状を送り、三月二十七日に京都府倶楽部で集会をもつことにした。その前にも集会をもったが、委員の集まりはわるかった。

新島は三月二十五日に北垣に手紙で、前夜訪問して会談の機会を得たことを謝すとともに、なお一、二件相談したいことがあるので参上したい旨をのべている。主たる用件は、北垣が尾越書記官とともに上・下京両区長に会って専門校（明治専門学校―のち同志社大学と改める）への協力を要請するとのことであったが、その際に「弊社英学校の由来」を今夜持参するので両区長に示してほしい、というものである。知事による説得の効果を高めるためである。

さらに三月二十七日にも北垣あての手紙で、昨夜わざわざ来訪されたことを謝し、集会に尾越、森本両書記官を北垣が誘導してくれることに対する謝辞をのべている。

「同志社大学記事」によると、三月二十七日の集会に出席したのは、北垣知事、森本後凋書記官、竹村藤兵衛・杉浦利貞両区長ら十九名で、山本覚馬ら八名が欠席した。欠席者の多くは病気その他の理由によるものである。

席上、新島が謝辞とあわせて「青年陶冶ノ一日も猶余スベカラザル」事をのべたあと、北垣は「大ニ私立専門

校ノ挙ヲ賛成セラレ、先ヅ其ノ美挙ナル事ト又人物養成ノ事ハ自治ノ政度ニ進マントスル今日ニ取〔リ〕甚必要ナル事ヲ陳べ、国道一己人ノ地位ヲ以テ徹頭徹尾之ヲ翼賛シ、一日モ早ク此ノ挙ノ成功ニ至ルヲ望ム」（「同志社大学記事」）と、静かなことばで語った。そして「寄附金募集簿」に、率先して三百円と記載し、翌日、中村栄助を私邸に呼んでそれを手渡したのであった。

北垣は「一己人ノ地位ヲ以テ」と語っているが、書記官や両区長を新島の運動に協力させたことからして、たんなる個人の資格とは言いがたい。それだけでなく、四月七日には、委員代表や区役所の書記が集まっているところへ、北垣は「突然ト委員ノ集会所ニ来ラレ、益計画ヲ大ニスベキ旨」をのべて督励している。委員たちは四月十二日に知恩院の大広間を借りておこなう予定の大集会の準備中であった。この席で、大集会に「人民招集ノ事ハ両区長ノ担当スル所ト定ム」と右の記事にあるところをみると、北垣は事前に両区長に指示を与えておいて、その確認ないしは念を押しに突如現われたものと考えられる。区長不在の場で「担当スル」ことなど決められるはずはない。決定どおり大集会の案内は上・下両区役所によってなされたのである。新島の京都地区における運動は、京都府庁に移った観がある。

大集会の会場を借用する手続きもそうである。借用名義人は設立委員の内貴甚三郎であった。彼は保勝会員の肩書きを利用した。だが、当時の新聞（「同志社大学記事」に切抜きが貼付されている）が報じるところによると、「最初京都府社寺係り中川武俊氏の書面にて、府知事初め設立委員の出頭する位の事」として知恩院に申込んできたとあるから、北垣の采配である。

同じ記事によると、明治専門学校という耶蘇教の学校に会場を貸したのは仏門の汚れだといきまく知恩院信徒有志は、知恩院の寺務所に取消しを要求したがらちがあかず、たまたま寺町四条下ル浄教寺に、別の用務で各宗派の管長などが集っていたので要請に赴いた。大集会の前日、十一日のことである。管長たちは信徒有志に同意の意向を示したものの、「北垣府知事の命令を社寺掛なる中川武俊氏が奉じて借入を照会したる事なれば、聊か憚るところあり」と、行動をひかえた。

信徒有志は知事の斡旋によることか否か、代表を北垣の私邸へ送って確認しようとした。知事は不在だからと、代って応対に当った執事の野村は、「明日は必ず知恩院の道場忽ち修羅場と化し淋漓たる血の雨は繽紛たる落花を染め出さん」などといきまく信徒有志代表に対して、「多分主人の紹介せられしならんと想像す、併し成る

べく温和の取計ありたし」と慰留した。これでことは明らかになったと、代表は「学校の周旋は人民のため実に其厚意を謝す、府知事の身を以て耶蘇教の周旋は仏徒深く之を悪む我輩長くお怨み申す」と言い捨てて去ったというのである。

北垣は反キリスト教の姿勢をとる新聞の攻撃など、当然予想していたろう。翌四月十二日、六百余名の出席を得た知恩院大広間での大集会に臨んだ北垣は、新島襄、浮田和民、金森通倫ら同志社教員たちに続いて、「専門学校ヲ賛成スル理由」と題して演説した。この集会がもたらした募金の額はともかく、新島の運動が一キリスト教私学のものではなく、京都府から全面的に承認されバックアップを受けているものであることを、関西全域に知らしめた効果の大きさは否定すべくもない。

北垣はその後も、東京の政界有力者を紹介するなど、新島に協力を借しまなかった。神奈川県知事の沖守固が新島に協力するのも、井上馨との関係もあろうが、北垣の同郷人だけに彼と無関係のこととは思えない。北垣は井上ともよしみがあったらしい。

新島が北垣に送った最後の手紙は、明治二十三年一月十日付で、大磯の百足屋で書かれたものである。主たる用件は、ハリス理化学校の設立に当たっている下村孝太郎を紹介することで、京都につくる学校なので「直接府不之実業職工等ニ利益を及ぼし度もの」と、下村が種々工夫していることもつけ加えている。新島はなんらかの方法で北垣に報いたかったにちがいあるまいが、この手紙を送って二週間たらずのちに他界した。

疎水事業を終えた北垣は、明治二十五年七月をもって内務次官に転出した。同志社が国粋主義の風潮の中で危機に陥るのは、その直後のことである。

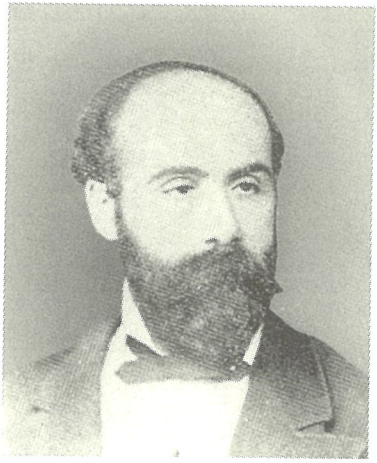
のちに社友として間接的ながら同志社の経営にも関与した北垣国道は、大正五年一月十六日、八十歳で世を去った。葬儀には同志社を代表して原田助社長が会葬した。北垣は黒谷墓地に眠っている。

なお、先年、疎水完成一〇〇年を記念して、北垣国道の銅像が、左京区夷川ダムのほとりに復元された。

（本部社史資料室長）

J・C・ベリーと新島襄

長門谷　洋治



1

新島襄（1843〜1890　敬称略）の本拠、同志社が出しておられる雑誌に、一部外者である筆者が彼について触れることは大変おこがましいことであるし、新島という巨人の趾尖の一端に達することさえ至難である。もっとも難しさということからいえば筆者にとってベリー（John C. Berry 1847〜1936　敬称略　以下同じ）も同様である。ただわが国の看護の歴史にいささかの関心を有する筆者にとって京都看病婦学校の名を避けて通るわけにはいかず、京都看病婦学校といえば、結局行きつくところは新島とベリーとなる。事実、二人の最大の接点は

京都看病婦学校である。新島がこの学校にかけた情熱、そしてこれを全面的に受け止めてその設立・運営に献身したベリー。二人の間には太い絆があった。筆者はこの点に惹かれ、不適を承知で本文を記させていただくことにした。

2

周知のように新島の死に繋がる最後の発病は明治二二年一一月、前橋においてであるが、発作の翌日二九日には不破ユウ（1864〜1936）が看病についている（『新島襄先生詳年譜』による。以下同じ）。彼女は京都看病婦学校を同年に卒えた第二回卒業生であり、不破唯次郎の妻で、当時不破が前橋教会牧師として同地にいたので、彼女もすぐに駆け付けることができた。新島は同年末、大磯に移るが、重態となった翌年一月二〇日に再び彼女は師のもとに呼ばれて看病に当っている。ここでの主治医は樫村清徳（東京・山龍堂病院長）であったが、二三日、新島臨終の約三時間前には京都よりベリーが来着。そのとき新島は幾分気分よく手を握って挨拶した。ベリーは温罨法など試みたが、同日二時二〇分死亡。樫村が当日来着したのは死亡後一〇分してからとのことなので、臨終に立ちあった医師はベリーということになる。それより先、一月一〇日、夫人あての新島の手紙には「ベレー様よりの丸薬も参り、リチャルド様よりの御書状も落手……」とあり（リチャルドは京都看病婦学校のリチャーズ）新島のベリーに対する信頼は最後まで変ることがなかった。

3

ベリー夫妻がアメリカン・ボード派遣の宣教医として大阪に着いたのは明治五年五月のことであり、当時すでにアメリカン・ボード派遣の宣教師としてはグリーン（明治二年来日）やデイヴィスなどがいたが、同ボードからの来日宣教医としてはベリーが最初である。

新島は同年五月ニューヨークより欧州へ出発しており、帰国は明治七年一〇月、そして大阪に来るのは同八年一月で、川口与力町の宣教医ゴードンのところに止宿、四月には京都に入り、一一月同志社英学校を開く。当時ベリーは神戸を拠点に活躍しているが、直接二人が解逅したという記録は見当らない。

これより先、明治六年、ベリーが代表となって神戸・大阪在住の宣教師八名の連名で、新島に対し早く帰国し

て宣教活動をするようにと申し出ている。明治八年になるとベリーの本部あて報告書に何度か新島の名が出てくる。

4

アメリカン・ボードの宣教医テイラー（Wallace Taylor 1835～1923）は明治七年一月に神戸に着きベリー宅へ寄留。同九年三月には同志社に雇い入れられ四月から人身窮理学の講義などを行い、一方彦根に診療所を開いたりしている。さらに京都でも診療所を開こうとしたが京都府が許可を出さず、新島が直接府に許可申請を行うが交渉はこじれてついに同一一年六月テイラーは京都を去るに至る。

当時すでに切支丹禁制の高札は撤廃され、外国人の行動も開港地を中心にかなり自由になってはいたが京都は仏教の勢力がとくに強く、行政もこれを無視できぬ面があったのではと推察される。かかる動向にかかわらず新島の大学設立の考えは明治一五年に明瞭となり、その構想中には医学部も含まれていた。

同年夏には有馬に避暑中のベリーに医学部創設につき相談、賛意を得ている。その後ベリーよりの誘いもあり、一一月一六日には松山高吉とともに新島は岡山に彼を訪ね、そのさい医学校・看病婦学校の英文校則案を参考資料として提供されたりしている。

ベリーは明治一六年一月に入洛、グリーン宅で医学校の件について協議しているが、同年六月ボード本部のクラーク総主事への報告書において「新島氏から協力の要請を受けている同志社医学部の設立は、この数年来我々の協議の主題であった」としていることから、外国人宣教師の間でも早くからこの問題について模索の行われていたことがわかる。そしてつぎのような具体案（抄出）を示している。「五人の教授があれば病院と学校、および看病婦学校を運営できるであろうが、まず一年目は私を含めて二名のアメリカ人と小野（俊二）医師で出発しよう。一万乃至一万五千円を土地建物の費用として日本人の有志が醵出すると信じる。約八万ドルの外国よりの寄付が教授たちの費用として必要である。最初は英語で教えるが、病院や看病婦学校では日本語を使用する。看護婦にキリスト教精神を鼓舞するため、二名の婦人を送って下さるようお願いする。ミス・タルコットがこの仕事にふさわしいであろうが、新しい人ならば日本語の看護学教科書の準備、日本の家族生活、言語の勉強などがあるので直ちに送られたい」

文中タルコットはタルカット（Eliza Talcott, 1836～1911 明治六年来日）で、彼女は看護婦ではないが、後年京都看病婦学校で働いた。ベリーのこの文ではすでに看護教育に重心が傾いていることが判る。

5

この間の同志社側の動きを「詳年譜」で抄出すれば明治一六年一月一八日、新島は大村達斎、市原盛宏、中村栄助らを自宅に招き医学校設立につき相談。五日後の二三日には河原町の商法会議所に大村達斎、伊東熊夫、中村栄助らと集まり医学校設立につき結社のことに決定。小野俊二（奈良病院長）を招聘のため、同人に交渉することとし、二七日には彼より応諾の返事を得ている。三月一五日、新島は岐阜県立医学校の病院を参観、同校の規則書などを入手している。四月二日には前記、小野俊二を堅田に招き、翌日琵琶湖に舟を出し水鳥の猟を楽しんだ。ところが同月九日の記載では「午後四時より山本覚馬方にて中村栄助、伊勢時雄らと看病婦学校のことにつき協議する」となっており、ここで看病婦学校が浮上してくる。

この経過で登場するのが上記大村達斎（1840～1889）である。彼は京都の医師大村達吉の養子となった医師で明治一四年一月に洞酌医学校を創り（当初堺町通二条上ル白木屋別宅、ついで建仁寺塔頭久昌院、最後は夷川土手町東入舎密局跡）六、七十名の生徒もいたが、明治一五年に出た医学校通則で学校内容の充実を求められた。そのさい新島の計画を知ったので、同志社に同医学校を譲ることを申し出た。しかし学校の教員など内部よりの強い反対が出て結局そのことはならなかった。当時京都府には京都府療病院（現 京都府立医科大学）があっただけで、新島にとっても願ってもない話であったであろう。だが国は明治二〇年ころに医学校への規制をさらに強め、京都府療病院の後身など府県立医学校で生き残ったのは全国で僅か数校、先の岐阜県立医学校なども廃校に追いこまれているので、よしんばこのとき譲渡を受けていたとしてもその後の維持管理はかなり困難であったろうことが予想される。洞酌医学校も結局廃校になった。要するにこの件は大村にとっては予想していなかった(?)学内の反発が原因で流れたわけで、大村に最初から悪意があったのではない。

この話は同志社にとってショックであったが、新島にはすぐ次善の案が浮んだ。そしてこれはベリー、すなわち欧州の古い医学校の歴史に通じている者にとっては納

得がしやすい内容であった。そもそも欧州では病院は修道院に端を発しており、患者はそこに収容され修道女が世話をした。必要なさいには外部から医師が呼ばれた。修道女が看護婦の役をしたわけで、最初に病院と看護婦ありきで、のちに病院付属として医学校ができたのである。新島はこの顰にならったわけで結果として同志社病院と京都看病婦学校の誕生を見た。ここでもうひとつ付け加えておけば、明治になってわが国医学はドイツを範とすることとし、その拠点を東大医学部においた。ところが当時でも看護はナイチンゲールを源流とする英米系が世界の主流であった。看護学校を創る点ではアメリカに学んだ新島、そしてアメリカン・ボードにとっては好都合なことであった。事実、ベリーの求めに応じて来日(明治一九年)したのは当時アメリカにおける看護界の頂点的な地位にいたリンダ・リチャーズ(Linda Richards 1841〜1930)であった。リチャーズの在任そのものが、看護史上、京都看病婦学校の名を不滅ならしめる要素となっている。

もっともボード本部では、当初より医学校の設置には批判的で、もしそれを設立する場合でも他の宗派との連合による医学校設立を考えていた。これに対し同ボードの在日宣教師はそのような形のものは早晩意見の対立がおこりうまく行かないであろうとし、ベリーも本部が医学校をもとうとしないのなら、ジャパン・ミッションだけで小規模であっても医学校をもつべきであると主張していた。

6

医学校にしろ、看病婦学校にしろ、新島はその設立について情熱をもってとりくんではいるが肝腎な経済面の裏付はなにもなかったといって良い。いわば構想を示しただけで、実際にその実現について尽力したのは彼の周辺の日本人とベリーを中心とする在日の宣教師らであった。ベリーは明治一七年三月、岡山県との契約が満了したのを機に岡山を離れて帰国、約一年半の間、生涯教育としての充電につとめるとともに、京都看病婦学校設立のための資金集めと人材の獲得に奔走する。一八年四月には当時訪米中であった新島とニューヨークで会っている。新島は同志社英学校創始にさいしてはアメリカでアピールを行ったが、今回の京都看病婦学校についてはベリーにまかせたような感がする。たまたま英人のモートンという人が一〇万ドルの寄付を申し出た。しかし当時のわが国には寄付行為に関する法規が整っておらず、結

局これを受領することができなかった。前述のようにベリーは発足にあたって外国より得たい額として八万ドルを考えていたのであるから、一〇万ドルはこれを優に越えていたわけである。結果として外国の寄付金は六、一〇五円五〇銭が得られこれが建築費となった。一方前述のごとくベリーは日本からは一万乃至一万五千円を期待していたが、得られたのは一、一三四円であり、その中の一、〇四四円で烏丸長者町かどに一、九五六坪弱の土地を購入することができた。いずれにしろ当時、内外の善意で七、二四〇円弱の寄付金を集められたのは成功であったといえよう。ちなみにベリーやリチャーズなどボードから派遣されたスタッフの給与はボードが負担していた。

ところで建物も完成し、開院・開校式も近くなった明治二〇年一〇月四日、新島より中村栄助あての書簡で「京都看病婦学校之名称変換之事をベレー氏より差迫り申候間……」会議を開き自分の考えも述べたいので、同日四時に山本（覚馬）宅へ来て欲しいと述べている。同志社病院は他日医学部ができたときにその名の方が都合が良いだろう、しかし看病婦学校は京都市民有志の寄付に負う面少なからずであったことを考慮し京都の名を冠したのではというのは佐伯理一郎の後年の推察であるが、同志社（＝新島）のために渾身の力をふりしぼったベリーとしては当然のクレームであったともいえよう。ただここには同志社からの資金がはいっていなかったことも事実で、後年同志社が学校・病院を処分しようとしたときにこのことが問題となっている。

7

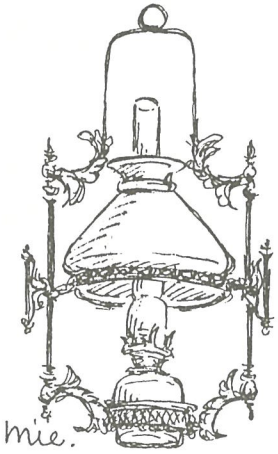
明治一九年九月二〇日、大日本私立衛生会京都支部会においてベリーと新島は『京都看病婦学校設立に関する演説』を行っている。その内容は今日にも通じる格調高いものであった。そして同月よりデイヴィス宅を利用して、授業、診療を開始し、同二〇年四月には英文年報“The First Annual Report of the Doshisha Hospital and Training School for Nurses”を出している。京都府への設立願はこれよりのち、七月二〇日で八月一一日に認可され、一一月一五日に盛大な開院・開校式が北垣国道知事らの出席を得て行われている。

発足当初のスタッフは校長新島襄、院長兼教師ベリー、看護婦長兼教師リチャーズ、教師（医師）バックリー（Sara C. Buckley 女医）、白藤信嘉、川勝原三、病院助手堀俊造である。ちなみに同校にはリチャーズのあとス

ミス(Ida V. Smith 明治二一年来日)、フレーザー(Helen E. Fraser 明治二四年来日)の二人の看護婦が来ている。わが国で明治期に三人もの正規の看護婦が来たところは京都看病婦学校のみであろう。ここにもベリーのなみなみならぬ努力があった。病床は三〇で多くはないが近代病院の様式を備えており、実習病院としての役割を果すには充分であった。

修学年限は二年、明治二一年六月に第一回の卒業式が行われ、卒業生は四名。翌年六月に第二回の卒業式が行われ、卒業生は七名、その一人に不破(旧姓北里)ユウのいたことは前述した。なお新島は第一回卒業式には出席せず、第二回には出席したが、これが同校卒業式出席のはじめでおわりとなった。これ以外にも開院・開校式などの他は新島はあまり同校に関与しなかったようである。ベリーに全幅の信頼をおいてまかせていたということと、たえず前向きの姿勢で当時は大学設立に全力を傾けていて看病婦学校に割く精神的・身体的ゆとりはなかったのであろう。

そしてベリーに在日中のあの精力的な活動を行わしめたのは「彼のキリスト教的人間観であり、世界観であったといえよう」と井上勝也教授は述べておられる(『宣教医同志社病院長ベリー』「新島襄　人と思想」晃洋書房平成二年所収)。

そのベリーと新島が同時代に邂逅したことは天の配剤によったとしかいいようがないように思われる。

(日本医史学会理事)